

二次元ぷち文庫

レディーキャット

Lady Cat

墮ちた気高き女王

瀧澤春

表紙イラスト…みかん。

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『レディーキャット ～堕ちた気高き王女～』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



レディーキャット

Lady Cat

堕ちた気高き王女

瀧澤春

表紙／みかん。

登場人物紹介

Characters

クリス・ローゼンハート

ローゼンハート家の王女。だが、魔術が使えない分、周囲を圧倒する剣技でレディーキャットとして、賊を倒す。

アホピス

交易都市ジブラタルを狙う盗賊団の首領。魔法を使うことができる。

深い闇が空を押し、地上に息づく生物たちに眠りを与える。

粘っこい泥のような闇の帷に沈んだ街。

その街中をゆっくり移動する十人ほどの一団があった。皆、判を押ししたように全身を黒い衣服に包み、目元だけを露出させる奇妙な姿。彼らの足並みは誰が命じることもなく、ある一軒の立派な門構えの邸宅でピタリと止まった。

彼らはどんどんとその家の敷地内に入っていく。そしてそのまま玄関へ向かう。

ノッカーを使うことなく、手で扉を二度トントンと叩く。すると。

「お待ちしておりました」

中からメイドが姿を見せる。メイドは黒ずくめの集団を見ても驚くそぶりを見せず、国王の前に進み出た騎士のように跪いた。

「首尾は？」

「はい。かなりの成果が期待できます」

メイドは、盗賊団〈ハマッドファング〉のメンバーだ。事前に襲う家屋敷の調査をするために潜り込んだいわゆる引き込み役。

そして彼女にかしづかれてるのが首領アポピスだ。〈ハマッドファング〉はこれまで近隣諸国で荒稼ぎをし、そして新たな稼ぎ場として、ここ西方第一の交易国家ジブラタル王国の首都バーブルに侵入したのだった。

アポピスはメイドからの情報を元に、部下たちを次々と散らばらせていく。

自身は一番の大物を狙う。メイドを先頭に部下三人を引き連れて、二階にある普段は物置に使われているらしい部屋に入る。

「こちらです」

メイドは壁にかけてある絵画を外す。すると絵があつた場所から大きな窪みが現れ、そこには金庫が収まっていた。隠し金庫だ。

「やってくれる」

男は部下が金庫の解錠をしている間、窓から外の様子を見る。丁度、この邸宅の門前で王国の夜警団が見回りをしていた。間抜けな奴らだ、とアポピスはほくそ笑んだ。

金庫が開くとその中にはぎっしりと金の延べ棒が詰まっていた。アポピスはすぐにそれらを袋に入れるよう命じた。そしてこの街での初仕事の大成功に気分をよくする。

「よし、行くぞ」

声を潜め、廊下に出る——と。

そこにはまるで彼らが出てくるのを待っていたような、ほっそりとした肢体の人物が立っていた。

「遅かったわね」

雲に隠れていた月が露わになり月の斜光が降り注ぎ、その人物の姿を露わにする。

7

細い身体だった。それらを包むのは肌にはピッタリと吸い付いたラバースーツ。指の先から爪先まで余すことなく覆う。そして月の光を反射して、妖艶な白光をツルリとした表面に浮かべている。

肌をびっちり覆うスーツは引き締まった太股、ヴィーナスのように括れたウエストを浮き彫りにさせていた。

胸元は大胆に逆三角形に布が切り払われ、豊かな胸の膨らみの競演によつて生まれた深い谷間を見せびらかす。

顔は、目と口元だけを露出させる同じくラバータイプのマスク。後ろからは月光によつてではなく、それ自体が光を放っているときさえ目を見張るばかりの美しいブロンドの髪が背中へ下りている。

マスクにはネコミミがポイントとしてあしらわれている。セクシーさとキュートさの蜜月がそこにはあった。

いきなり目の前に現れた扇情的な衣装の女性を前に、男たちはギョツとする。だが彼らを驚かせたのは少女の格好だけではない。少女の腰元に下がっている、その姿から考えるに少々不釣り合いな細身の剣だ。

「な、なんだ。てめえーはっ」

「あなたたちこそ、誰かしら？」

死ねっ！ 盜賊の一人が、ダガーを片手にいきなり襲いかかる。

キンッ！

しかしダガーは、長剣にあっさり受け止められていた。

アポピスは二階廊下の手すりを飛び越え、吹き抜けになっている一階広間へ早々と飛び降りる。メイドもそれに続く。

「てめえの相手は俺たちだ！」

少女が追いかけてしようとす。しかし三人の盜賊がその行く手を阻む。少女は目つきを鋭くさせ、長剣の柄を強く握り締め直した。

屋根づたいに走って逃げる二つの影。

「くそ、ついてない。同業者かっ!？」

アポピスは苛々した風でメイドに厳しい視線を飛ばした。

「仲間割れなんてみつともないわねっ」

二人は足を止める。そして自分たちの進行を阻む女の姿を見る。

「観念しなさいっ」

少女は前に進み出た。アポピスは慌て、

「お、おいっ。待て！ お前もあの家を狙っていたんだろっ。ならお前にも分け前をやる

よっ」

金を詰め込んだ麻袋の口を開いて見せた。

純金の輝きが、暗がりに眩しい。

「外道っ！ 私をお前らのような賊と同じようにするなつ。私はレディーキヤットつ！ この国を守る者だッ」

女は長剣を引き抜き、そして構える。そんなありきたりな動作でさえ、少女がすると堂に入つて、謹厳な風格がある。

「レディーキヤット？」

しかし、そんな名前の盗賊に聞き覚えはないようで、アポピスは小首を傾げた。

「この国の平和を乱す者は誰一人として許しはしないっ——成敗！」

「話の分からんヤツだ」

キヤットスーツに身を包んだ少女は剣を上段に構え、棟木の上を音もなくアポピス目がけて走り出す。

だがその剣はダガーに受け止められる。

メイドが、フリルドレスを揺らめかしながら、首領の前へ身を滑り込ませていた。その顔は盗賊そのものだ。

「首領っ。早くお逃げ下さいっ」

淫術。その言葉に血の気が引き、小刻みに総身が震えて大量の汗が噴き出す。産毛がチリチリ燃えるような熱い痺れ。これが呪力なのだろうか。だが魔力の恐ろしさと一緒に、魔法学で学んだ——呪力は意思の強さで阻むことが可能であると。

(ローゼンハートの家名に賭けても負けられない！)

王女が覚悟を改めて決めた時、裁判官が立ち上がった。

「ええい。高潔な裁判の場でなんと破廉恥な！ だがこれでお前の嘘が証明された。貴様
は王女ではない。偽証罪だ！」

裁判官の無茶な発言に反論しようとするクリス。しかし急に喉が絞まり、声が出なくな
った。

「処刑人。王女を騙る被告人の口を清めよ！」

クリスに近づく巨漢。顔は三角布で隠され、目穴だけがあいている。

クリスは後退ろうとしたが大男に腕を掴まれ、無理矢理四つんばいにさせられる。

クリスの輝かしい金髪がザバツと身体に枝垂れた。

(王女の私がこんな格好……！)

畜生の格好に王女のプライドは傷ついていく。それにこの格好は国民に尻を曝け出す形。
脚を広げると、透けている恥裂も僅かに口を開く。

「ううううっ」

国民の前で尻を曝け出してしまっている。国民にこんな破廉恥な姿を見させているなんて……考えるだけで、悪寒のようなゾクゾクとした魅惑の感覚が臀部を這う。

魔力の効果とはいえ、国民に見られながら感じてしまう。王女としては恥じ入るべき浅ましい行為に、神聖な肉体がどす黒く染まっていくようだ。

そして呪具の影響は確かに出ているようだ。四つんばいの格好になると、両腕で胸を挟み込む形になり、胸の奥から何かが搾り出されるような熱情を感じるのだ。

乳暈が熱くじれ、乳首が戦慄を感じてしまう。

「さあ見ろ」

処刑人はいきなり綿パンツを脱いだ。

「ひっ」

巨体に似合う卑猥な隆起がまろびでる。頭を押さえられ、顔を背けられない。野太い肉茎の先端に赤黒い亀頭。

長大にそそり勃った肉勃起は、腹にくっついてしまいそうなほど反り返り、その先っぽからは腐臭が漂う。

(な、なんなのコレ!?)

いきなり見せつけられた肉棒に、クリスはただ戸惑うばかりだ。

『男のちんぽを見るのは初めてか?』

念話を使うアポピス。王女が狼狽しているのが面白くてならないらしく、笑いを囁み殺している。

(汚らしいわ、こんなモノ)

臭いだけで、咽せてしまいそうだ。

「さア。しゃぶろうか」

(しゃぶるって！ こんなものを口でっ!!)

必死に声を出そうと試みたが、掠れて不発に終わる。クリスは口を閉じ、顔にづけつけと衝き込んでくる肉棒を遮り続ける。その代わり頬や鼻の頭に、肉棒の先端がぶつかり、粘っこの液が顔をベトベトにした。

肉棒自体の熱さと、頭の中を掻き混ぜられるような不快な臭いで今にもへばってしまいそうになる。

『いい加減、大人しく啞えろっ』

腕の中の呪具が蠢き出す。

(な、何!?)

手首の中の振動に気を取られていると、頤がキリキリと軋む。唇が戦慄き、内側から誰かにこじ開けられているように、勝手に唇が開いていく。

「観念したか。この罪人めっ！」

罪人という言葉が胸にグサツと突き刺さる。冤罪に心が喘ぐ。

「むんぐううッ!!」

男の野太い肉槌が、まだ僅かにしか開いていない口腔を無理に捻げ、押し入ってきた。

(くうっ、臭い……!)

胸がギュウと握り締められるような窮屈感。

「ほーら、穢れた口がどんどん洗浄されていくぞ」

処刑人の肉棒がスルスルと口腔の奥へ奥へ入っていく。嗚咽に何度もクリスの喉笛が波を打つ。やがて、男の根元まで強制的に飲まされる。

「ううっ!!」

喉奥を突かれ、鼻から息が漏れる。あまりの臭さと苦しさに、必死に舌で押し出そうとする。しかし頭を抱えられ、ずっしりと口腔を圧迫したペニスは外れる気配がない。

(苦しい……抜いて……え。窒息しちゃう!)

息苦しさにクリスは顔を真っ赤に染める。

まるでそれが恥じ入っているように見え、処刑人の性欲を煽る。

『ほら、どうした。舐めて早く楽になつたらどうだ?』

無理だ。こんな汚らわしいモノなんか舐められるはずがない。

麗姫は息苦しさに眼を潤ませて、首を振った。

『たく。手のかかる姫君だぜ』

アポピスは嘆息を漏らす。その念話の直後。

再び手枷が震え出した。呪力は炎のように熱い迸りとなって下顎に飛び火し、舌をねじ上げる。

(い、痛い！)

舌が、顎が勝手に動き出す。クチュクチュ、と溢れる唾液がアルコールのように、口腔粘膜を灼いた。

「おお！ こりやスゲエ」

処刑人は歓喜の声を上げた。

「ンちゅつ。ぐおつ、はあうつ、ちゆるるる」

顎の動くまま、舌の誘うまま、クリスは肉棒フェラを行う。その舌使いは呪具によって手練れの娼婦のように、的確に男の快感ポイントを吸い罅る。

「ンヂユヂユツ……んく。ちゅつうう！」

龟头を擦り、エラをひき、そのたびに飛び出る濃厚な先走りを喉が波打って、飲み下す。
(私が出させているの？)

「ぢゅぢゅ……！」

こんな破廉恥な様を民に見られている。そう思うだけで、下半身のムズムズした感触は

目の前が真っ赤に染まり、狭い口腔内に灼熱感が溢れ返る。

（口が変になる、口が、アアアア……！）

身体にうつすら積もる脂肪をフルフルと震えさせ、少女は全身を貫く稲光に崩れた。

肉棒が口から引き抜かれると、王女は咽せ返る。そしてそのか弱い唇の隙間から、濃厚な白濁液を吐き出した。

「うーっ、うーっ」

王女は口腔を汚され、荒い息をつく。

少女の細い身体に、ネッチョリとへばりつくキャットスーツ。鞣し革のツルツル感が、今では不快感ばかりを煽る粘っこい拷問着に変わっていた。

（熱いつ。うう……お尻が熱い）

嚙下した精液が血に混じり、全身に流れているような錯覚さえ覚えた。尻の奥、どこか分からない場所が滾っていた。

——おい、アイツ。おま○こ濡らしてるんじゃないか？

——ああ、すつごく尻振ってやがる。

民のざわめきが残酷なほどに聞こえた。

気品に溢れ、讃える声に包まれた王女という身分に生まれた少女は、今身体の女を感じさせる部分ばかりを国民にさらけ出し、悶えている。民の声がどんなに強力な呪術よりも、

どんなに鋭い刃よりも王女の心をグジャグジャにする。

そしてこの場が、厳正に罪を裁く神聖な場所だと認識すると、さらに身体のもどかしさは高まる。倒錯的な快感が噴き上がってきてしまう。

(これはこの呪具のせいよ！ 私が変な訳じゃないのっ!!)
弁解は虚しく心で揺れ動く。

「皆さん、静粛に！」

裁判官は顔を真っ赤にし、眼をギラつかせて叫んだ。

「王女を騙りながらも娼婦のような女——いや牝豚に、当裁判所は即刻刑を執行すべきと考えますッ」

クリスは腹奥に響いてくる残酷な響きと、身体を隈無く噛まれるような疼痛に耐える。柳眉を顰め、淡い瞳を潤ませる姿は、色っぽいを通り越して淫らだ。

「被告人レディーキヤットは終身刑に処す!!」

(そ、そんなあつ！)

晴天の下、野外裁判での判決文が高らかに読み上げられた。

「放しなさいっ！」

少女の声が粗い石づくりで、湿気が多い個室に反響する。

肉棒ごしに送り込まれてくる熱で頭が沸騰しそうだ。この瞬間も男たちの視線は執拗に少女の乳果に注がれ、スーツの汗を吸って色の変わった所に目を奪われているのだ。スーツは全体的に黒っぽいのに、愛液を散々漏らした痕跡がさらに黒い軌跡を作り、どんな筋道を通って垂れていったのが、一目瞭然だった。

「ふふ、可愛らしいお尻ね。首領。そろそろ」

自分の知らない所で交わされる密議。クリスは眼を動かす。

「ひっ」

尻の浅い割れ目を撫でさする女の指が、ある一点で止まる。むず痒さが尻朶を炙り、腰骨を揺さぶってきた。

（何をするのっ!!）

「ひあっ」

スーツごしの尻孔に負荷がかかり始めた。

息が詰まる。

「知ってる？ 本物の痴女つてのはアヌスまで使えるんだって」

女の眩きに、目の前のアポピスが嗤う。

ピリリッ！

尻孔に付着していた布が切り裂かれる。今までの行為によって汗をびっしよりかいた身

体。胸に続いて、肛門まで皆の目に曝された。露わになる尻朶は真っ赤に染まり、悩ましい。さらにムツとする熱情の中に柑橘の果汁を溶かしたような甘酸っぱい香りを振りまく。そこはまるで人の器官ではないようだ。熟れた果実だ。むしろぶりつきたくなる食べ物だ。
 (見ないでえ。お尻の孔見ちゃいやああ)

クリスは息づく不浄穴に人の視線が張り付くのが分かった。誰にも見せたことのない孔が人前に晒される。

弱い心を守る防壁である気丈という堤防に、蔑視の視線が突き刺さり、ヒビが入っていく。
 「さあ、あなたが痴女か確かめてみるわ」

女が耳にフウと息をふっかけた。全身の毛穴が開き、キラキラとクリスの肢体を彩る。
 ギチツ。

「ふうあう」

後方で何か磨り潰されるような感覚が響いた。硬く、冷たく、そして太い。

「何っ!? 何なのっ!!」

「あなたの忘れ物を返してあげているのよ」

女は微笑むと、クリスの愛剣の入っていた鞘を尻孔へ押し込む。何の前触れもない肛門への異物挿入に、目の前に幾つもの火花が散った。

「裂け……ウウ！ 裂け、ひゃ……あぐっ!!」

耳の奥で何かか軋む音が聞こえ、呼吸のタイミングが掴めない。あまりの辛さに碧眼がみるみるうちに涙を溜めていった。

「大丈夫だぜ。呪具は宿り主を決して殺させない」

だがそんなアポピスの言葉なんて関係なかった。現にクリスが感じているのは臀孔がこじ開けられ、和毛の痺れるような圧迫感だ。

「さすがはあなたの持ち物ね。主人の身体にどんどん馴染んでいく」

真つ二つに裂かれるのではと思うほどの恐怖が胸をいっぱいにしていく。

だが一方で、鞘は入り口のひくつく窄まりをこじ開けると、ズズズズ……と排泄粘膜を巻き込んで、奥へ奥へと埋まっていくのだ。尻孔は痛々しいほどに広がる。

「ふう、あぐううううううッッ!!」

少女は肛虐というおぞましい感触に、全身に怖気が奔るのを感じた。

(苦しい！ お腹破れちゃうっ)

少し肛粘膜を擦られるだけで、腹まで突き上げられるような違和感。だがそれでも王族の血にかけて、屈しないと少女は懸命に抗う。

負けない、こんなことで私は屈しない！

そう心の中で力めば力む程、もどかしい倒錯感が少女の理性をきつく歪めていった。

尻がとろけてしまいそうな甘い当惑が、近接した膣を吸い尽くす。ずつとそこに嵌った

ままの肉棒が焦れたく、いい加減肉棒の感触に馴れてきた子宮は、屹立からの圧迫感に物足りなさすら感じてしまう。汚辱と恥辱が薄皮を剥くように、段々と薄れていく感覚が自分でも信じられない。

「さアもう一つ。返してあげる」

「え、ええっ……!!」

少女は、気を緩めてしまえば今にも瓦解しそうな程、発火した意識を抱えながら息を吐く。女が持っていたのは鞘に収まるべき劍。クリスと共に成長してきた戦友というべき刃。

「何を……するの!!」

粘膜に潜り込んだ鞘が気になって、言葉がどもってしまふ。

「劍が帰る場所なんて、一つしかないでしょ」

そう言うと女は劍を鞘へ戻した。

「あっつぐうっ!!」

鞘だけでも辛いのに、劍が収まると、さらなる圧迫感と疼痛感が全身を苛んだ。

「俺もそろそろ動いてやるぜっ」

アポピスは抽送を開始した。奥底まで押し込まれていた肉棒が引き抜かれる。

すっかりラバースーツは膣壁に搦め捕られ、張り付いてしまっているらしい。

そして張り付いたままの生地に、襷のこと細かな形が浮き出ている様子は、クリスの女

陰のコケティッシュさを一層強めた。

「さあ、いくぞ！」

再び奥底まで穿つ。

「くひゃあつ！」

出っ張ったエラが子宮を串刺しにする。一滑りごと燃え立つ擦過感に、電撃が腰骨を幾度となく貫く。

「むうほおおつ、うかああつ！」

アポピスの肉棒は、腹側の膣部である膣前壁を執拗に擦り、性的興奮に蠢く感触を吸う。そのたびクリスは少女に似つかわしい、快楽に乱れた声を上げた。

「ああつ、すごい……ううハア！」

肉欲を刺激する男根と、スーツの裏地。一度の挿入で味わわされる二重の苦しみ。しかし膣道のツブツブとした場所を器用に引っかかれると、頭の中が真っ赤に染まった。

後ろでも再び剣が抜かれ、それによって鞘も巻き込まれ、敏感粘膜が捲り返る。

グジュツ、ズチュツ、ジユブツ、ズウン！

「ひい、きゃあつ、ううつ、だ、ダメエ……死んじやう、壊れひやううつ!!」

交互に繰り返される鮮やかな衝撃。クリスは排泄器官で展開される、苦しみの業火に焼かれた。

そして前後ストロークの激しさに、手首を押さえているロープがミシミシと鈍い音をたてる。

排泄と挿入が何度となく、魂を貫く勢いで心の中にまで侵入してくる。

「どんどん締まってくるっ！　ううっ……凄くキツキツのおま○こ！　処女だとは思えないぜ」

「やめてえ！　突かないで。ああ、変につ。変になあかあやつ」

ズチユズチユツ！

股間部から繰り出される愛液の織りなす音の美が、禍々しい悪夢となって少女の興奮を高めた。

少女の愛液は白濁へ変わり、奥底を穿られるだけで頭蓋骨は震撼する。そこにあるのは確かな快感だった。

目の眩むばかりの、理性の溶けてしまいそうな莫大な悦楽。

「どうなの、お尻は。お尻はどうなの!？」

剣を抜き差しされる。愛剣が紡ぐ、背中に感じるゾクゾクとした氷のように冷たいスリル感。それはやがて、少女のアヌスを性感帯へ仕立てるだけに止まらず、マゾヒスティックな煌めきへ変貌させる。

それは命がけで悪と戦った時に得られる高揚感に似ていた。命を賭する戦い。死ぬかも

知れない、もう二度と剣を握れなくなるかも知れない。魔法を使えない少女にとって剣は自我の砦だ。危険が大きければ大きい程、アドレナリンによって生み出されるときめき。(ああ……私は敵と戦いながらも感じていたの？ 気持ちよかったから戦っていたの?) 呪具の送り込んでくる呪術は宿り主へ快楽をもたらすと共に、その感覚から悦楽以外の全てを奪い去る。

これまで国民のため、自分が出来ることをしていたつもりだったクリスの使命感は、忽ち自らの倒錯的な快楽を得る手段の方法の一つだと書き換えられてしまう。

(だめえ……もう狂う……!!)

媚薬になったという血が子宮へ集まり、柔褻を膨らませる。それをガシガシと抉られるのだ。もう耐えられなかった。手先から爪先まで、紫色の電撃で包まれる。

「出すぞ、出してやるからな」

「さあ、最後の一発よ！」

「出さないでえ！ 妊娠しちゃうかあやあつ!!」

出されたら本当に死ぬ。気持ちよすぎて死んでしまう。

「くらえつ、罪人!!」

ドビュツ、ビュブルルルルルルルルッ!!!

「いやあああああああ——っ」

大量の精液がラバースーツごしに吐き出された。まるで煮詰めたお湯を袋に入れ、服ごしに挿んでいるような感覚だ。熱さと液体が段々じわじわと襲に染み込んでくるのは、身心中を一辺に灼かれるよりも辛い。

心の弱い部分が、白濁の爪牙に切り裂かれていく。

「イクイクイククウウ!!!」

いつの間にかアポピスの背中に回していた腕。腹奥へ次々と噴きかけられる白辱の洗礼に、アポピスの背中を搔きむしる。さらに宙づりで、文字通り地に足がついていない状態の王女は、男の腰に足を絡めてしまう。それが踏ん張れないことへの不安からなのか、ただ深い密着を自らが望んでいるのか、それはクリス自身にも分からなかった。

「ひいつ、ひ、ひ、ふあううう」

王女クリスは二人の盗賊に挟まれ、肛虐と膺責の二重苦を細胞の一つ一つ、魂の一欠片にまで刻み込まれ激しい絶頂に陥った。

「ひゃあ……う……うぐつ……も、もう……し、死んじやう……」

だらしなく開いた唇から、唾液が伝い落ちていく。

全身が幾重もの痙攣に襲われる。少女の顔に浮かんだのは、淫らで陶酔的な表情。大男に持ち上げられた脚はピンツと伸びて、筋肉が引きつっている様がよく覗けた。

アポピスが肉棒を引き抜く。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>